キャッチボールの面白さ

萩市特別学芸員　一坂　太郎

手紙というのは、時代の空気を知る上でなによりも欠かせないし、内容が天下国家にかかわるなら、絶好の史料になることもある。維新の元勲と呼ばれる人々の書簡集は、維新から半世紀をへたころから堰を切ったように世に出始めた。

維新の三傑を例にとれば、平凡社が大正十五年（一九二六）から昭和二年（一九二七）にかけて『大西郷全集』全三冊を、日本史籍協会が昭和二年から四年にかけて『大久保利通文書』全十冊と、昭和四年から六年にかけて『木戸孝允文書』全八冊を世に出している。今日我々が三傑の生の声に接することが出来るのは、これら編纂者たちの苦労あればこそだ。それがどれ程大変な作業であるかは、私も史料集（『高杉晋作史料』全三冊）を編纂した経験から、少しは分かっているつもりである。

ただ、右の三傑の史料集は編まれた時代的制約もあり、故人を偲び、顕彰するための「遺稿集」という側面を、大なり小なり備えていた。だから研究のための史料集として使おうとした場合、不便を感じないわけではない。

そのひとつが、原則として発信者の手紙が並ぶだけなので、内容が一方通行になりがちなことだ。会話のキャッチボールにならないのである。『大久保利通文書』などは「参考」として、たまに来翰なども紹介してはいるが、それでも十分とは言い難い。

このたび復刻される立教大学日本史研究室編『大久保利通関係文書』全五冊は、まず、こうした不満を解消してくれる。原版は昭和四十年から四十六年にかけ、吉川弘文館から出版された。これを先年復刻された『大久保利通文書』と合わせ鏡のようにして読めば、大久保とその相手の文通がある程度、再現出来よう。

たとえば明治四年（一八七一）、廃藩置県の準備が進むころのこと。大久保が木戸あて書簡に、「国家の大事」だから旧藩主毛利敬親を上京させて欲しいと懇願すると（三月十八日『文書』）、帰郷していた木戸は敬親は病気が重くなり、ついに没したと大久保に返事をする（四月五日『関係文書』）。事実、敬親は三月二十八日、山口で他界していた。両巨頭の受けた衝撃の大きさが推測出来る。これは、大久保・木戸ともに来翰をまめに保存する人だからこそ可能だった。来翰を保存する習慣が無かったと思われる高杉晋作や坂本龍馬では、こうはいかない。ちなみに『大久保利通関係文書』に収められた大久保あて木戸書簡は七十八通、中には『木戸孝允文書』に収録洩れ分もあるようだ。

『大久保利通関係文書』が嚆矢となったのか、近年になりようやく、近代政治家への来翰が編纂、出版されるようになった。長州出身の元勲で言えば伊藤博文・山田顕義・山県有朋・品川弥二郎、そして木戸孝允等々への来翰だ。ただ、伊藤や山県のもとに集まった来翰は活字になっても、彼らが発信した手紙を丹念に集めた「遺稿集」的な史料集の方が、いまだ出ていない。あまりにも膨大な手間と時間を要するからだと思われるが、ビッグネームにもかかわらず、誰も手をつけないようだ。大久保と木戸のように、会話のキャッチボールが再現出来ないのかと思うと、ちょっと残念でもある。

元勲・大久保利通宛の書翰
約四千通を編纂した根本史料
四十年ぶりに待望の復刻！

大久保利通関係文書［全五巻］

立教大学日本史研究室編

■限定三百部
■勝田政治編「人名索引」を別冊添付

マツノ書店

内容見本
（原寸大）

七五　黒田清隆

一　明治二年五月

榎本（武揚）以下降伏之手順大略左之通

五月十一日賊窟進堅海陸三面ヨリ相懸り難なく五稜郭際迄押詰先ツ賊之動静を窺ひ居函館弁天崎台場ニも残賊弐百人位籠居只纔五稜郭二ケ所計ニ而実ニ討滅掌中ニ在り、然シ

叡慮ニおひて蒼生ノ疾苦を御救解被成度の事而已ニ而真ニ改心謝罪降伏之実行挙ケ候得は寛大之御処置を以而遇セらる儀と兼而体任候得は如何シテ賊中ニ右之件々申入れ度思慮致居候折、賊病院函館ニ在り軽重病人弐百人許其内会残賊諏訪常吉ありと聞き即ち本営ニ抵り池田次郎兵衛ニ示談其夜深更諏訪ニ面会賊之情実巨細承ル、しかして天兵を加へたる趣得と説諭を加へ同人ハ今日ニ立至り候而は一言も無之何とも面目なき次第夫レ程難有

叡慮今日承り実ニ陳謝するニ道なし死して余罪ありと感涙を流し真ニ先非悔悟之色眼（ママ）目ニ形れ是非弁天崎台場且ツ五稜郭ニ右御趣意相通シ度頻ニ歎願ニ付其意ニ任ス、然処余程難渋ニ見受ケ気之毒ニ相考候ニ付金子壱万疋遣し而帰る、翌日草稿持せ来候付処々筆を加へ差返し早速病人中慥なる者三人を撰ひ右台場ニ遣シ候処誠ニ恐入斗なれと何分榎本ニ同盟いたし居候得は是非郭中ニ掛合之上御答いたすとの事なり、又右三人ヲ同処ニ遣し候云々返詞別紙榎本、松平〆病院医師高松陵雲、小野権之丞ニ名当遣ス、弁天崎台場ニ籠居の者ハ即チ降伏いたし候得共右郭中は是非志願不達内ハ甘し而天戮ニ就くとの事ニ而候得共実ニ殄滅する事

叡慮ニも不叶且私本意ニも無之断然賊永井玄蕃ニ元永山友右衛門田島敬蔵相添郭中ニ入れ又々叡慮云々申入候得共決し而不承引節は人事尽き無致方其翌未明朝懸と議を決シ浜手海軍且ツ山田市之允方ニも掛合其手組いたししかして初メ降伏致し候者共ニ郭中云々相成候ニ付榎本と死を共ニ致度人々は無遠慮申出べくと申入る、此内唯壱人山田某あり、実ニ感心之者ニ而其朝津軽賊窟挙ケ而郭中ニ遣し候、其翌日賊ヨリ止戦を乞ふ斥候場ニ榎本、松平両人出来り田島敬蔵ニ逢度と乞ふ、然

八四　西郷隆盛

一　安政六年一月二日

大義の一挙に付御策問の趣幾度も承知仕候得共、小生儀土中の死骨にて武運に拙く殊に大義を後にいたし端島に身を逃候儀、譬へば破軍の降卒にて、起て御断申上候儀に御座候得共数ならずも

先君公の

朝廷御尊奉の御志親く奉承知如何にもして

天朝の御為めに不可忍の儀も相忍び、道の絶はて候迄は可尽の愚存に御座候間不顧汚顔拙考の儀も御返事申上候間、必御親察被下御用捨奉希候

一、堀より肥藩の決心一左右到来云々

按ずるに弥々決心候ても、越ニ一往の返事不承届候て事を挙候儀は決て仕間敷、越と事を合て繰出可申儀と相考申候、夫のみならず、筑、因、長の一左右も必ず見合可申儀と奉存候、就ては事を挙の機会十分相調候はゞ兼て格護の事候間御突出奉願候、其節遅疑仕候儀は忠義の人に非候、併機会を不見合候て只々死を遂さへいたし候得ば忠臣と心得候儀、甚以て悪敷御座候間、是非御潜居被下候処奉合掌候

一、堀若や幕手に相掛候節盟中の憤激云々

按ずるに盟中の人難に相掛候迚無謀の大難を引出し候儀有志の可為儀に御座候哉、大小の辨別を不分事と相考申候、依人成程残念の至に御座候得共、堀も何為に奔走仕候哉、其心志を御取可被下死を決して天朝の御為に尽すに非ずや、左候得ば其志を受候こそ盟中の盟たる大本と相考申候、余り理屈ケ間敷御座候得共、楠公の正行を帰たるは子々孫々迄も朝廷の御為に忠義を遺したる儀の大親切後世迄も仰慕所其節正行も共に戦死仕候はゞ大孝子にて御座候哉、遺訓を守て忠節を尽し候所、不論して明なり、能々御勘考可被下候、千騎が一騎に成候迄も我党の忠節を尽し候所肝要に奉存候、必ず前事の不可移儀に御座候

一、三藩へ暴命の云々

按ずるに三藩に暴命を発候はゞ弥破れ可申、もふ此

見直しが進められる大久保利通像
『大久保利通関係文書』復刻版の刊行に寄せて

京都薬科大学准教授
鈴木　栄樹

日米開戦前夜に『外政家としての大久保利通』を執筆した清沢洌は、「恥ありといへども忍び、義ありといへども取らず」（「征韓論に関する意見書」）とする大久保に仮託して、リアリズムの政治姿勢を時の為政者へ訴えかけていた。しかし、その後、大久保のリアリズムは正当に評価されることなく、むしろ一般には、「非情」で「冷酷」な「専制的官僚」という大久保利通像をつくり出してきた。そうしたなか、この一〇年ほどの間に、大久保利通像の見直しが着実に進んできた。「人望」のある「有力な政治的リーダー」（佐々木克『大久保利通と明治維新』一九九八年）、「熟考と果断の政治家」（勝田政治『〈政事家〉大久保利通』二〇〇三年）という評価への転換である。現代日本の拙劣な権力闘争を幕末維新期に当てはめ、あるいは権力と民衆という単純な二項対立を措定してしまえば、大久保利通は岩倉具視とともに格好の権謀術数家と錯覚される。そうではなく、変革期におけるあるべき政治的リーダーを求めるならば、大久保利通こそそれにふさわしい人物と評することができる。私自身も、かつて岩倉使節団編成過程の通説を批判するなかで、前者のような見方に疑問を呈したことがある。

大久保家が当時所蔵していた大久保宛書翰や第三者間書翰を中心に編纂した『大久保利通関係文書』との本格的な出会いは、大学院時代に遡る。京都大学文学部所蔵になる薩摩藩士吉田清成の関係文書を整理・刊行する作業に携わるなかで、主として大久保書翰をまとめた『大久保利通文書』などとともに、本書にはたいへんお世話になった。残念ながら吉田書翰は含まれていないが、『大久保利通文書』に比べて本書には幕末期の薩摩藩関係諸家の書翰が多く収録され、慶応元年に吉田や森有礼らの留学生が英国へ送られる前後の同藩の動向を知る手だてとなった。また、明治三年末のアメリカからの帰国以来、吉田を重用した大久保が卿を務めた大蔵省を知る上でも、本書は欠くことのできない書翰集であった。

大久保の周辺には、吉田清成のような薩摩藩出身者以外にも多くの人材が集まった。その一人で、本書に西南戦争期の書翰二〇余通が収録されている前島密は、大久保について、「公務上のことは極めて忠実」で、「よく人にも計り、人の言をも容れた人」であるが、裁決した以上は躊躇することがなかったと述べ（佐々木克監修『大久保利通』）、こうした点が大久保の「人望」を支えていたことを窺わせている。

実際、西南戦争勃発の時期に大久保に採用されて内務省にはいった旧彦根藩士の西村捨三も、かつての讐敵薩摩藩の大久保を「公正剛毅、申分なき大宰相」と評していた。その大久保が、翌年五月に非命の最期を遂げたおり、西村は、先主直弼の遭難と重ね、「何とも痛恨の至り」と嘆き、終焉の地清水谷に「贈右大臣大久保公哀悼碑」を建立するために尽力した（『御祭草紙』）。鉄道や治水・港湾事業に専念した西村は、大久保が死の直前に述べた第二期の課題、すなわち「内地を整ひ、民産を殖する」（「済世遺言」）という路線の継承者の一人であった。

マツノ書店からはすでに『大久保利通文書』『大久保利通日記』『大久保利通伝』など、一連の大久保利通関係基本史料が復刻されている。今回復刻される『大久保利通関係文書』全五巻は、それらの掉尾を飾る仕事として、満を持しての刊行と聞いている。本書には、岩倉具視の五四二通を最多として二〇年間にわたる約四〇〇〇通の書翰が収録されている。大久保利通関係の史資料は、現在、鹿児島の黎明館、国会図書館県政資料室、歴史民族博物館の三ヵ所で所蔵されている。刊本に未収載の史資料についても、各機関での目録作成により、利用が容易になっている。大久保利通というリアリズムの政治家は、十全に開花した姿を見せることなく無惨にも摘み取られてしまった。おりしも今年は大久保暗殺から一三〇年目にあたる。勝田政治氏による「人名索引」が新たに付された本書の復刻が、大久保利通とその時代、さらには大久保の感化を受けた人々に関する研究へのさらなる弾みとなることを願って推薦の辞とする

『大久保利通関係文書』の復刻に寄せて

金沢大学人間社会学域学校教育学類教授
同附属高等学校長
奥田　晴樹

『大久保利通関係文書』は、大久保宛の書翰を収録したものである。

利通の孫にあたる故・利謙氏の立教大学教授退任を記念する編纂・刊行事業であり、五十音順に秋月種樹から渡辺昇までの一八七名の来翰者ごとに、編年・年欠編月・年月欠編日の順で配列した約四〇〇〇通の書翰を収載している。来翰集であることから、大久保自身の動静が分かる手がかりとなるだけではなく、幕末維新期の政局に棹さす人々の動静を知る上でも貴重な史料集となっている。

筆者自身の経験では、島津久光の側近で初代金沢県参事・初代石川県令となった内田政風（まさかぜ）の事歴を探索する過程で、この『大久保利通関係文書』を参看し、大久保宛の一六五通と他者宛のものなど一六通、合わせて一八一通もの書翰に出会った。内田については、近年になる『近現代日本人物史料情報辞典』全三冊（伊藤隆・季武嘉也（すえたけよしや）編、二〇〇四～〇七年刊）でも取り上げられておらず、その動静をこれだけまとまった形で知ることのできる史料集は、鹿児島県史料の『玉島島津家史料』全一〇冊（一九九一～二〇〇〇年刊）を除けば、他に見あたるまい。内田のような例は他にもあり、また別の利用法も多々あろう。

『大久保利通関係文書』は、記念事業の出版物という性格のためか、初刊以来、再刊されておらず、長らく入手が困難な状態にあったが、今回マツノ書店から復刻される運びとなったことは、学界にとって誠に慶賀すべきことと思われる。マツノ書店は、『大久保利通文書』のほか、大久保の代表的な伝記である勝田孫弥著『大久保利通伝』全三冊（一九一〇～一一年刊）も先に復刻しており、斯界に貢献するところは少なくない。

このような大久保に関する研究条件の改善が、大久保利謙・毛利敏彦・佐々木克（すくる）・勝田政治らの諸氏によって開拓されてきた研究水準を継承・発展させる後進の出現に繋がることを大いに期待したい。

大久保利通関係文書の関連人物

目次

1 秋月種樹
2 有栖川宮熾仁親王
3 有村有雄
4 安藤胤典
5 安藤則命
6 池田寛治
7 池田徳潤
8 石井邦猷
9 石井源三
10 石井省一郎
11 石河確太郎
12 石川
13 石原近義
14 伊地知貞通
15 伊地知清太郎
16 伊地知壮之丞
17 伊地知正治
18 伊集院兼寛
19 伊藤博文
20 伊東方成
21 犬塚盛巍
22 井上馨
23 井上毅
24 井上大和
25 今井銕太郎
26 岩倉具定
27 岩倉具綱
28 岩倉具視
29 岩崎長武
30 岩村通俊
31 岩下方平
32 岩元太右衛門
33 巌谷修
34 岩山敬義
35 巌谷竜一
36 内田政風
37 江藤新平
38 大木喬任
39 大久保満次
40 大隈重信
41 大鳥圭介
42 大原重徳
43 大村益次郎
44 大山巌
45 大山綱良
46 海江田栄介
47 海江田信義
48 香川敬三
49 勝安芳
50 桂四郎
51 桂久武
52 門脇少蔵
53 金井之恭
54 加納鉄哉
55 鎌田十郎太
56 川上竜衛
57 河北俊弼
58 川路利良
59 河瀬秀治
60 河田景与
61 汾陽次郎左衛門
62 川村正平
63 河村純義
64 岸良兼養
65 岸良俊介
66 北垣国道
67 北島秀朝
68 木戸孝允
69 木梨精一郎
70 桐野利秋
71 九鬼隆一
72 久木山泰蔵
73 日下部東作
74 楠本正隆
75 黒田清隆
76 黒田清綱
77 黒田長溥
78 桑原戒平
79 五代友厚
80 後藤象二郎
81 木場直右衛門
82 木場伝内
83 小松帯刀
84 西郷隆盛
85 西郷従道
86 税所篤
87 斎藤貞蔵
88 嵯峨実愛
89 嵯峨根良吉
90 作間一介
91 佐々木高行
92 佐藤金義
93 佐野常民
94 沢井近知
95 三条実美
96 志々目献吉
97 柴原某
98 柴山良輔
99 滋山清彦
100 四条隆謌
101 品川弥二郎
102 島義勇
103 島津主殿
104 進藤長義
105 島津良馬
106 島津求馬
107 瑞巌
108 副島種臣
109 高崎五六
110 高崎正風
111 伊達宗城
112 田中不二麿
113 田辺太一
114 谷干城
115 谷村小吉
116 千葉滝口
117 調所広丈
118 寺島宗則
119 寺田弘
120 徳大寺実則
121 鳥尾小弥太
122 中井弘
123 中島信行
124 中島直人
125 中根雪江
126 中村清行
127 中村源吾
128 中村蘇八
129 中村武夫
130 中村弘毅
131 中山中左衛門
132 中山順宗
133 長岡護美
134 奈良原繁
135 中御門経之
136 新納嘉藤二
137 新納刑部
138 西徳二郎
139 西村亮吉
140 野津鎮雄
141 野辺盛起
142 橋口助右衛門
143 八戸順叔
144 早川景炬
145 林友幸
146 平元良蔵
147 広沢真臣
148 広沢富治郎
149 福島新二郎
150 福島半助
151 福羽美静
152 福村某
153 藤井宮内
154 藤井助市
155 藤井直二郎
156 藤井彦兵衛
157 船越衛
158 古荘嘉門
159 堀右京亮
160 堀清之丞
161 堀直太郎
162 堀基
163 本田親雄
164 前島密
165 真木和泉
166 槇村正直
167 牧山慎蔵
168 町田直五郎
169 松方正義
170 松田道之
171 三島通庸
172 蓑田伝兵衛
173 三好退蔵
174 村田新八
175 森有礼
176 安田定則
177 安場保和
178 山尾庸三
179 柳原前光
180 山県有朋
181 山口尚芳
182 山田顕義
183 由利公正
184 吉井友実
185 渡辺清
186 渡辺央
187 渡辺昇

■大久保家では大久保利通の死後、遺子たちが亡父の日記・記録・書翰・諸家よりの来翰類の蒐集保存に努めてきた。そのうち日記と書翰類は早い時期にまとめて刊行されたが、来翰類の完璧な整理にまでは至らなかった。

■昭和四十年、大久保利謙が立教大学を定年退職する記念として来翰類の出版に踏み切り、約四千通に及ぶ大量の文書を解読・編纂し、六年がかりで吉川弘文館より全五巻を刊行した。

■この編纂作業には児玉幸多・小西四郎・遠山茂樹・田中彰・宇野俊一・上沼八郎・原口宗久・由井正臣・佐々木克など日本史学会を代表する多くの学者も参加した。

■本書は維新史究明に不可欠な根本史料であるにもかかわらず、これまで一度も再版されることなく入手困難で、早くより各方面からその再刊を待たれていた。

■小社では左記の通り、入手困難な大久保関係史料をこの五年間、鋭意復刻してきたが、本書はその掉尾を飾る仕事である。

①**大久保利通文書　全十巻**　昭和4年刊
②**大久保利通日記　全二巻**　昭和2年刊
③**大久保利通伝　全三巻**　勝田孫彌編　明治44年刊
④**甲東逸話**　勝田孫彌編　昭和3年刊
⑤**大久保利通**　松原致遠編　明治45年刊

■体　裁　A5判上製箱入
全五巻＋人名索引　二三〇〇頁
■定　価　四万円（税・〒八百円）
■特　価　三万五千円（税・〒込）
■特価締切　本年五月末日（厳守）
■発　売　平成二十年八月上旬
限定三百部
▼書店不卸　▼分割払可　▼返本OK
・本書を「日本史籍協会叢書」と同じ二段組に直せば、全十巻に該当します。
・立教大学・吉川弘文館との覚書は「三五〇部」が上限です。早めにご予約下さい。
山口県周南市銀座2～13
☎〇八三四㉑二二九五
マツノ書店